

Title	ベトナム人中上級日本語学習者の漢字習得における漢越語利用：介護福祉士国家試験対策の考案に向けた基礎研究
Author(s)	Phan, Thi My Loan; 道上, 史絵; 比留間, 洋一
Citation	外国語教育のフロンティア. 2022, 5, p. 55-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87567
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ベトナム人中上級日本語学習者の漢字習得における漢越語利用 — 介護福祉士国家試験対策の考案に向けた基礎研究 —

The Use of Sino-Vietnamese Words in the Acquisition of Kanji by
Vietnamese Intermediate and Advanced Japanese Language Learners

PHAN THI MY LOAN · 道上 史絵 · 比留間 洋一

要約

本稿は、ベトナム人中上級日本語学習者を対象としたインタビュー調査から得られたデータに基づき、漢字習得における漢越語（ベトナム語の約7割を占めるとされる中国語由来の漢字語彙）の利用について記述、分析したものである。本稿は、漢越語を利用した介護福祉士国家試験対策を今後考案していくための基礎研究に位置づけられる。

本研究では、大学・大学院で日本語を学習している留学生7名及び介護福祉士看護師国家試験合格者4名（以下、介護看護既卒者）にインタビューを行い、どのように漢越語知識を生かしてきたか／生かしてこなかったか、その背景に何があると考えられるかについて明らかにしようと試みた。インタビューはベトナム語で行い、質的分析の結果について執筆者全員で検討を重ね、最終的に執筆者全員でデータ解釈の合意を得た。

留学生7名は、人によって程度の差はあるものの、漢越語知識を漢字や語彙の記憶、読み方や意味の推測に利用していた。一方、介護看護既卒者の場合、2名は漢越語を利用し、残り2名はほぼ全く利用していなかった。後者2名が国家試験に合格できた背景には、1名は参加プログラムの特殊性に起因すること、もう1名はクラスメイトの中で「意欲がとても高い」（留学生担当教員）という特殊性に起因していた。また、初めに受けた指導方法がその後の漢越語の利用如何に影響することが示唆された。

以上から、第一に、ベトナム人介護人材にとって漢越語知識は国家試験対策として有効な「潜在能力」であるため、介護福祉士国家試験を目指すことになったベトナム人介護人材は、なるべく早期に漢越語を用いた漢字学習を導入することが望ましいという視点が得られた。第二に、本研究では、ベトナム語における全ての漢越語が利用可能であるというわけではないことも示唆された。日常生活でよく使用される漢越語であればすでにベトナム語の意味と結合されているため、その漢越語からの漢字語彙の意味推測への利用が可能となるが、あまり日常的に接することのない漢越語だと、ベトナム語の意味がそれだけでは分からないため、即利用可能とはならないようである。そのため、そのような漢越語の場合はまず純粹ベトナム語の意味と結び付ける作業が必要となると考えられる。

これら本稿で得られた知見は、漢越語を利用した介護福祉士国家試験対策を今後考案し

ていくための重要な礎となるものである。

キーワード：ベトナム語母語話者、漢字習得、漢越語、介護福祉士国家試験

1. はじめに

1.1 背景

本稿は、ベトナム人中上級日本語学習者を対象としたインタビュー調査から得られたデータに基づき、漢字習得における漢越語（ベトナム語の約7割を占めるとされる中国語由来の漢字語彙）の利用について記述、分析したものである。本稿は、漢越語を利用した介護福祉士国家試験対策を今後考案していくための基礎研究に位置づけられる。

近年、日本における外国人介護人材の受け入れは、EPA（経済連携協定）を皮切りに留学、技能実習や在留資格「特定技能」へとその枠組を広げ、拡大傾向にある。その中で最も増加したのがベトナム人であり、2021年6月時点の外国人全体に占める割合（上記4種の合計）は約44%である。より具体的には、介護留学生の46.5%¹⁾、介護技能実習生の39.2%²⁾、在留資格介護の50%³⁾、特定技能介護の52.8%⁴⁾を占める。

それに伴いEPA看護師介護福祉士に関する研究は活発化・深化してきた⁵⁾が、ベトナム人介護人材の特徴に焦点化した研究はまだ乏しい⁶⁾。しかしながら介護留学生の場合、次のような喫緊ともいえる課題がある。2020年度、介護留学生の養成校への入学者数は2,395人と日本人を含めた全体の約3割を占め、そのうち約半数をベトナム人が占めた。その一方で、介護留学生の介護福祉士国家試験の合格率は低迷（2019年度は39.2%）している⁷⁾が、2027年度以降、国家試験に合格しなければ在留資格「介護」が得られなくなる可能性が高いのである。

そうした状況を受け、日本介護福祉士養成施設協会（以下、介養協）は、厚生労働省からの受託により、2018年度、2020年度、介護留学生を対象とした全国調査を実施している。本稿のインタビュー協力者の属性の位置づけとして、そのデータを確認しておく⁸⁾。2020年度に実施した養成校に在籍する外国人留学生へのアンケート調査（2020年度に卒業予定の外国人留学生計2,009名を対象として2020年11月実施）によれば、①国籍で最も多いのがベトナムで50.2%(n=1,011)、②性別は女67.2%、男32.1%(n=1,011)、③年齢は「～25歳以下」が46.7%、次いで「26歳～30歳」が40.9%(n=1,011)、④JLPT（日本語能力試験）の合格しているレベルはN3が37.3%、N2が30.4%(n=976)、⑤母国での最終学歴は短期大学・専門学校が39%、高等学校が32.3%、大学・大学院が24.6%(n=1,011)、⑥母国で「看護に関係がある資格」（卒業資格ふくむ）は「持っていない」が71.3%、「持っている」が28.7%(n=1,011)、⑦「介護福祉士国家試験に合格したいですか」は、「必ず合格したい」69.2%、「できれば合格したい」28.8%(n=990)、である。2018年度に実施した養成

校に在籍する外国人留学生へのアンケート調査によれば、①介護福祉士養成課程の修業年限は2年が81.2%で最も多く(n=467)、②介護福祉士養成施設入学前の居住地は「日本にいた」が86%(n=464)、③介護福祉士養成施設入学前は「日本語学校に通っていた」が90.5%(n=393)となっている。

また2020年度の介養協調査の成果物の1つである『介護福祉士国家資格取得に向けた留学生指導についてのガイドライン』には、「介護福祉士国家試験に必要な日本語力」として「留学生指導のポイント」が3つ挙げられている(日本介護福祉士養成施設協会2021b:41-42)。それは「(1) 介護福祉士国家試験は日本語の試験ではない」、「(2) 類推力のために必要となる「漢字」、「漢字語彙」、「読解力」、「(3) 読解力」である(下線は筆者)。この指摘は、「EPA 介護福祉士候補者に対して、国家試験対策指導を10年余」行ってきた橋本由紀江氏(一般社団法人 国際交流&日本語支援 Y 代表理事)らの経験に裏打ちされた知見と考えられる。また、先行研究によれば、介護福祉士国家試験の試験問題に頻出の漢字のうち日本語能力試験(旧試験)の2級レベル以上の漢字は約70~80%を占めている(中川2010, 2012)。これらの先行研究から、漢字と漢字語彙の習得が国家試験対策の鍵の1つであることが示唆される。そこで、次に、漢越語を利用した漢字学習に関する先行研究を概観し、研究動向における本稿の位置づけについて述べる。

1.2 先行研究

ベトナム語を母語とする日本語学習者の日本語習得には様々な困難があると言われる(松田2016)。その中でも特に漢字学習に困難を感じる学習者が多い。確かに非漢字圏の学習者にとって日本語の漢字を学ぶことは難しいことである。しかし、ベトナム語の中には漢字語彙(漢越語)が豊富に含まれており、完全な非漢字圏とは言えない。そのため、漢越語知識を日本語の漢字学習に利用する有効性は以前より指摘されている(Phan 2006, 中川・小林2008, 松田2016, Phan ほか2017)。

日本語学習者の漢字学習ストラテジーに関する先行研究には濱川(2015a, 2015b, 2016)がある。濱川は、SILL(Oxford 1990)をもとに作成された調査票にさらに改良を加えた新たな質問票を作成し、学習者の学習方法と学習に対する意識についての調査を行っている。濱川が作成した質問票は多言語翻訳されており、その中にベトナム語版もある。学習方法に関する質問項目は全11カテゴリー43項目で、その中の「母語」カテゴリーに注目すると「(日本語の)漢字の意味と母語のことばの読み方を結び付けて連想する」という項目がある。この「母語のことば」はベトナム語訳では「Hán Việt」(漢越語)となっており、漢越語知識を利用しているかどうかを問う項目となっている。この質問票を用いてベトナム語母語話者に対する調査を行ったのが加藤(2017)である。ベトナム人技能実習生46人⁹⁾を対象に行った調査の結果、上記の漢越語知識に基づくストラテジーを利用すると回答し

たのは 69%であり、「漢字が分からない時、教師や友達に聞く (76%)」(社会ストラテジー)に次いで多い結果となっている。

ベトナム語母語話者に対する調査には、他に天野 (2017) がある。天野は濱川 (2016) とは異なる質問票を用いてベトナムの大学で日本語を学ぶ大学生 151 人に対する調査を行っている。調査の結果、漢越語から意味を推測する、漢越語を使って覚えると回答した学習者が多く、漢越語の知識を漢字語彙の意味推測のためだけではなく、記憶するためにも利用していることが明らかとなった。他にも、ベトナム語母語話者が漢字を学ぼうとする際に漢越語知識がプラスに働く可能性は多くの調査研究により示されてきた。

しかし、それと同時に、実際はその利点を生かせていない学習者も存在することもまた指摘されている。ただ、先行研究の多くは量的調査であるため、一人ひとりの学習者が実際に自らの漢越語知識をどのように意識し、それを漢字学習にどのように生かしてきた／生かしてこなかったのか、そしてその背景に何があるのかについてはまだ明らかになっていない。そこで本研究では、まずは大学・大学院で日本語を学習している学習者に個別インタビューを行い、どのように漢越語知識を生かしてきたか、その背景に何があるかを把握し、その上で、介護福祉士国家試験合格者に個別インタビューを行い、どのように漢越語知識を生かしてきたか／生かしてこなかったか、その背景に何があると考えられるかについて明らかにしようと試みた。

2. 調査方法

2.1 調査協力者

本調査の対象者の概要を表1¹⁰⁾と表2に示した。

表1の調査協力者(留学生、男性1名、女性6名)は全員、20～30代で、日本の大学もしくは大学院に在籍している。表2の調査協力者(介護・看護既卒者、男性1名、女性3名)は、平均年齢は前者(表1の協力者)より若干高い(Hが40代で、Kは30代、IとJは20代)。日本語学習歴¹¹⁾も前者よりも長い(前者の平均は5.8年、後者は8.25年)。在籍先は、前者が現在学生であるのに対して、後者は卒業して働いている(Hはベトナムでは短大看護学部の教員である)。表1の協力者は2021年6月、表2の協力者は2021年8～9月に、オンラインによる半構造化インタビューを行った。インタビューは全てベトナム語で行い、実施時間は1人1時間から1時間半程度であった。

協力者の抽出は機縁法を用いた。すなわち本稿執筆者の知り合いのベトナム人に調査趣旨を説明し直接依頼し、これに応じた協力者全員を対象とした¹²⁾。機縁法を採用することにより、まず日本語・言語学・法学(非介護・看護)専攻の者の中から漢越語利用を積極的に行っている可能性が高い者を抽出した(表1)。表1の協力者へのインタビュー実施後、その調査結果について日本語教育方法研究会(2021年9月12日オンライン開催)で

口頭発表を行った。データ解釈に対して参加した研究者から特に否定的な意見は無かった。ただ、1名の研究者から、「筆者らが先行研究等を基に漢越語を利用することが日本語学習に有利に働くとの見方を研究

の前提としているが、本当にそれは前提となるのか」という疑問が投げかけられた。そこで、この問いを念頭に、機縁法により、表2の協力者を選定した。それが漢越語を積極的に利用していないHとJを抽出した

1つの理由である。また、機縁法を採用したもう1つの理由は、インタビュー・データ以外にも協力者についての背景知識を参照することが可能であり、それにより考察の信頼性を高められるから、である。

本研究の主眼は介護留学生のための国家試験対策の考案である。そこで、表2の4名に絞って一人ひとりの特徴的な背景について記述する。

Hは介護福祉士ではなく、看護師国家試験合格者である。あえてHを抽出した理由は合格後日本で4年間看護師として働いた経験や介護留学生の国家試験学習支援をした経験があるため、介護福祉士国家試験における漢越語利用の効果についてのメタ的な視点や相対的な見方に基づく意見をHから聴取できると考えたため、である。Hのベトナムでの日本語学習(17か月間)は、AHPネットワークスという日本のNPO団体が1992年から2010年にわたりベトナム人看護師を日本で養成したプログラム(以下、AHPプログラム)の一環であった¹³⁾。AHPプログラムの日本語教育は漢越語を用いた教育は行っていなかった。

Iはベトナムの大学の日本語専攻を卒業後、来日、2年間日本語学校で学んでいる時に介護に興味をもち、介護福祉士養成校(2年間)で学び、国家試験に合格した。特記すべき点はベトナムの大学に在籍中に、ホーチミン市にあるドンズー日本語学校(学習初期から積極的に漢越語を利用した漢字指導を行うことで知られている)で2年間学んだことである。

Jはベトナムの高校を卒業後、来日するためにベトナムでN5まで日本語を学んだ。来日

表1 調査対象者(留学生)の属性

仮名	日本語学習歴	JLPT	在籍校	専攻
A	4年1月	N1	大学院	言語学
B	6年6月	N2	大学院	日本語教育学
C	3年6月	N2	大学(交換留学)	日本語
D	3年6月	N3	大学(交換留学)	日本語
E	3年6月	N2	大学(交換留学)	日本語
F	6年	N1	大学	法学
G	14年	N1	大学院	言語学

表2 調査協力者(介護・看護卒者)の属性

仮名	日本語学習歴 ⁽¹⁾	JLPT取得	在籍先	専攻
H	約12年	N1	大学院	看護
I	約8年	N2	介護施設	介護
J	約4年	N2	介護施設	介護
K	約8年	N2	監理団体	介護

後は2年間日本語学校で学んでいる時に介護留学生奨学金プログラムに参加、介護福祉士養成校（2年間）で学び、国家試験に合格した（Iと同じ第32回介護福祉士国家試験）。Jの場合、これまでの日本語教育の中で漢越語を用いた漢字学習についての学習機会はなかった。

EPAプログラムにより来日したKは、ベトナムの短大（3年）看護課程の「既卒者」である。EPAプログラムに採択後、1年間ベトナムで日本語教育を受け、N3に合格、2014年6月に来日、2か月間の集合研修後、同年8月より受入れ介護施設で介護福祉士候補者として働きながら、国際厚生事業団（通称JICWELS。EPA候補者の日本側の唯一の受入れ調整機関）の教育指導の下、介護福祉士国家試験の学習を行ない、2018年1月の国家試験に合格した。EPAベトナム人介護福祉士候補者は、来日後に漢越語を用いた漢字学習教材¹⁴⁾を配布され、Kの場合もその教材を用いて約3年間、毎週、施設において日本人教師の下、漢字学習を行っていた。

2.2 質問項目の設定

インタビューの質問項目を設定するにあたり、濱川（2016）、天野（2017）から漢越語の学習ストラテジーに関する質問項目を抽出した後に、必要と思われる質問項目を追加し、以下の質問を設定した。

- Q1 日本語を学ぶ過程において、漢字学習をどのように感じていたか。
- Q2 日本語の漢字の「字形」、「読み」、「意味」、「使い方」をそれぞれどのように学習したか。
- Q3 漢字、漢字語彙学習の難しい点は何か。
- Q4 自分は日本語の漢字、漢字語彙を学習するための特別な能力を持っていると思うか。あるとすれば、それは何か。
- Q5 日本語学習を開始する前、ベトナム語に漢語由来の言葉（漢越語）があることを知っていたか。
- Q6 日本語の漢字、漢字語彙を覚える際、漢越音・漢越語を利用しているか。
- Q7 漢越語の知識を新出語（漢字語彙）の読み方を推測するのに利用しているか。Q8 漢越語の知識を新出語（漢字語彙）の意味を推測するのに利用しているか。Q9 日本語の漢字語彙を学習する際、漢越語との違いを意識しているか。
- Q10 もし漢越音・漢越語がベトナム語に存在しなかったら、日本語の漢字語彙学習はどのようなと思うか。
- Q11 漢越語の知識が最も役に立っているのはいつか。

上述した通りインタビューはまず、日本の大学や大学院で日本語・日本語教育学・言語学(対象はベトナム語)・法学を専攻するベトナム人留学生7名(A～G)を対象として行った。そこで得られた知見を基に、日本の国家試験に合格した介護・看護既卒者4名(H～K)のうち、日本語を学習する過程において漢越語を勉強した2名(IとK)に対するインタビューに下記の項目を加えた¹⁵⁾。

- Q12 漢越語から日本語の漢字の音読みを推測することがあるか。
- Q13 漢越語の中でベトナム語の意味と結びついているものとそうではないものがあると思うが、日本語の漢字語彙学習に漢越語を利用するとき、その2種の漢越語ではどのような違いがあると思うか。
- Q14 (漢越語を利用する場合) 初級と中級以降のどちらの時期において漢越語知識を利用したか。それはなぜか。
- Q15 漢越語と日本語の間に音もしくは意味の異なりがある場合には、漢越語を使わず日本語の意味だけを覚えようとするか。もしそうなら、それはなぜか。

2.3 データ分析方法

インタビュー内容は協力者の許可を得て録画し、その録画データを執筆者全員が共有した。表2の協力者(4名)は文字化したデータを共有した¹⁶⁾。まず第1著者と第2著者が別々に「このデータから何が言えるかについて」の質的分析を行った。その後、その結果について執筆者全員で検討を重ね、最終的に執筆者全員でデータ解釈の合意を得た。

3. 結果

留学生に対するインタビューの結果と、介護・看護既卒者に対するインタビュー結果を表3にまとめる。なお、表中での「漢字」は日本語漢字を指す。また、表は2.2に挙げた質問項目ごとではなく、質問の内容ごとにまとめた。

3.1 留学生の事例¹⁷⁾

日本語学習過程において、これまで漢越語による日本語漢字の指導を受けた経験があるのはA、B、F、Gである。全員がベトナムで受けた日本語教育の課程で指導を受けている。しかし、主に漢越音と日本語漢字の音読みの対応の指導であり、漢越音とベトナム語の意味を結び付けた指導は受けていない。

漢越語の重要性については全員が認識をしていた。しかし、半数以上がはじめに字形を覚えることに苦痛を感じたと語り(A、C、D、F)、ベトナム語母語話者にとって日本語の漢字学習は大きな困難を伴うものであることが確認された。

表3 インタビュー結果

質問項目	留学生 (n=7)	介護・看護専攻 (n=4) *下線部分はIの意見
1) 漢字学習に対する印象	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめは字形を覚えるのが難しいと感じた ・漢字が難しいが、重要だと思う ・はじめはストレスを感じた ・漢字・漢字語彙に初めから興味がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめは難しいと感じた ・<u>面白いと感じた</u>
2) 漢字、漢字語彙「字形」、「読み」、「意味」、「用法」の勉強法	<p>字形:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリを用いる ・何度も書く ・字形を見て覚える <p>読み方:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリを用いる ・字形と漢越音を対応させる ・文字ごとに覚える ・読み方を予測し、辞書アプリで確認する ・似ている場合は漢越語知識を利用する <p>意味:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリを用いる ・日英辞書を用いる ・漢越語を用いると記憶に残りやすくなる ・似ている場合は漢越語知識を利用する ・異なる場合は漢越語知識を利用しない <p>使い方:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・似ている場合は漢越語知識を利用する ・日越間で品詞が違うなど、語彙の使い方が異なるので、それを意識するようにしている 	<p>字形:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何度も書く ・部首を利用して覚える ・書き順を覚える ・教師が書いた手本を見る ・画数が少ない字から多い字へと覚える ・よく使う字から難しい字へと覚える <p>読み方:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリを用いる ・<u>漢越音と音読みが似ているのでそれを利用して覚える</u> <p>意味:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語で意味の説明を受け、日本語で学習した <p>使い方:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語やベトナム語などの媒介語を使わずに、日本語の辞書だけを使った ・日越間で使われ方が異なる場合、教師の説明をよく聞いた ・そのまま暗記した
3) 漢越語の存在	知っていた	知っていた
4) 漢字語彙の読み方推測	<ul style="list-style-type: none"> ・漢越語知識を利用する ・部首の知識を利用する ・漢字の音読み知識を利用する 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢越語から推測しない ・漢字の音読み知識を利用する ・<u>漢越語から推測する</u>
5) 漢字熟語の意味の推測	<ul style="list-style-type: none"> ・漢越語の知識を利用する 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢越語の知識を利用する ・漢越語の知識を利用しない
6) 漢字語彙習得への利用	<ul style="list-style-type: none"> ・初級では漢越語知識をよく利用していたが、中級以降では利用しなくなった ・利用しない 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢越語知識を利用しない ・<u>漢越語知識を利用する</u>
7) 日越間の違いについての意識	<ul style="list-style-type: none"> ・意識する ・違いがある場合は日本語のみ使用するようにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・意識する ・意識しない(そもそもベトナム語を媒介語としない)
8) 漢越語は日本語学習に必要なか	<ul style="list-style-type: none"> ・あった方が記憶に残りやすい ・なかったら読み方の推測ができなくなる ・なかったら理解するのが難しくなる ・なかったら漢字学習が難しくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・あった方が記憶しやすいし、意味の推測ができる ・漢越語が分かれば意味の推測ができる ・<u>漢越語はベトナム語母語話者の利点だ</u>
9) 漢越語が役に立つ場面	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語初学者の段階 ・専門分野を学ぶ時 ・政治経済分野のニュースを読む時 ・自分の専門外の分野で、漢字が多く用いられる資料を読む時 ・漢字学習、日常生活、経済分野 	<ul style="list-style-type: none"> ・介護分野の漢字語彙を学ぶ時 ・試験 ・<u>読解問題を解く時</u>

漢越語を利用した日本語漢字の字形の学習に漢越語知識を利用している人はいなかった。しかし7名のうち6名が読み方の学習、意味の学習において両言語間の類似性を利用する学習方法を現在実践している、もしくはこれまで実践したことがあると語った (A、B、D、E、F、G)。意味の学習においては、特に両言語間の相違点を意識するという意見が多かった。また、漢越語知識は初級の学習実践ではよく利用していたが中級では利用しなくなったと語った学習者もいた (E、F、G)。これは漢越語の知識が初級以上で有効であるとする松田 (2016) と異なる結果となった。

日本語の漢字の音読みや漢字語彙の意味の類推においては、半数以上が漢越語知識を利用していると答えた。特に読みにおいては、部首を利用すると意見もあった。一方で、漢越語を利用するのではなく、既習の日本語漢字の音読みの知識を他の熟語を読む際に応用すると答えた人もいた。

日本語漢字語彙の学習の際、漢越語との異なりを意識するかについてはほとんどが意識すると答えたが、異なりを認識した場合は漢越語の知識を用いることをやめ、日本語のみでその語彙を理解しようとする と答えた人が多かった。

漢越語知識が有効にはたらく場面は、日本語の初級の段階、日常生活、専門書など漢字が多く含まれる文章を読む時、ニュースを読む時、が挙げられた。

3.2 介護・看護既卒者

これまで漢越語による漢字の指導を受けた経験があるのはIとKであった。その背景は先述の通り (2.1) である。ただ、KはEPAプログラムにおける1年間の訪日前日本語研修では特に漢越語を用いた漢字指導はなかったが、その頃から漢字を調べると漢越語が表示されるアプリ (Mazii¹⁸) を利用していたことがインタビューによって分かった。

漢越語の有効性は全員が認識をしているものの、実際に利用しているかどうかは人によって異なる。まずHとJはほぼ利用していない。Iはよく利用している。Kは利用することもあるようだが、主に意味の類推に用いており、漢越語を特に有効利用できるのは国家試験においてであると考えている。

漢字語彙の学習に関しては、留学生と同様に字形の学習に漢越語知識を利用している人はいなかった。読み方の学習、意味の学習においてはIが漢越語を利用していると答えたが、他の3人は特に漢越語を利用していなかった。漢字語彙の使い方の学習に関しては、4人とも漢越語知識を使っておらず、日本語をそのまま覚えたということだった。

漢越語を漢字の音読みの類推に利用すると答えたのもIのみだった。漢越語を使用しない場合は、既に覚えている日本語の音読みの知識を他の熟語の読みに応用している。しかし、意味の推測にはH、I、Kが利用すると答えた。

漢字語彙の学習の際、漢越語との異なりを意識するのはIとKで、特にKは職場で後輩

のベトナム人スタッフのために通訳をすることがあるので、意味の異なりを意識すると語った。意識しないのは漢越語をほとんど用いていないHとJで、特にHはベトナム語を媒介語として学習をしていないと語った。

漢越語知識が有効にはたらく場面については、Kは介護分野の漢字語彙を学ぶとき、国家試験において、と答えた。Iは読解問題を解く時と答えた。

4人のうちIだけはベトナムの大学で日本語を専攻しており、漢越語の利用頻度も高く、留学生の7人と属性が似ていると思われることから表2ではIの回答に下線を引いている。

4. 考察

4.1 留学生の事例から

1) 漢越語からの漢字の音読みの類推

Bは漢越音と日本語の音読みの音韻関係の規則を既に習得しており、規則的に日本語の音読みの類推が可能になっている。Bはベトナムの大学在学中に、同じ大学の先輩に次のようなアドバイスももらった。まず、BẢNG THƯỜNG DỤNG HÁN TỰ「常用漢字表」(Đỗ Thông Minh, 南芸者) にアルファベット順に掲載されている漢越語と、その漢字の日本語の音読みを並べて書く。そして漢越音の音節¹⁹⁾の頭子音と主母音の前の介母音、後ろの末子音と声調を含む韻部とそれらに対応する音読みを比較する。先輩によれば、それによって両言語の音韻の関係が分かるということだった。Bはそれにより、HÌNH (形)、HẢI (海) 等Hという頭子音を持つ漢越音は音読みでは多くの場合「K」で始まる音に変わること気が付いた。同様に、HÌNH (形)、KINH (経) 等「INH」という韻部を持つ漢越音は音読みでは「EI」に変わることが多いことが分かったと言う。

Bの語りを他の例も挙げて説明すれば、以下のようになる。

頭子音における音韻関係

漢越音	日本語の音読み
H - ÌNH (形)	K - EI
H - ẢI (海)	K - AI
H - Ạ (河)	K - A
H - OÀNG (黄)	K - OU

韻部における音韻関係

漢越音	日本語の音読み
H - ÌNH (形)	K - EI
K - ÌNH (経)	K - EI
M - ÌNH (明)	M - EI
T - ÍNH (性)	S - EI

Bはこの漢越音と日本語の音読みの音韻関係の法則を、その後受けた日本語能力試験3級²⁰⁾の漢字の問題に活用し、ほとんど正解したという。現在でも、特に漢字語彙が多い文章を読む時にこの知識を有効活用している。

2) 漢越語からの漢字の意味の類推

意味の類推に関しては、個人差はあるものの全体的に使用されているようである。使用する場面として挙げられているのが「専門書を読む」「ニュースを読む」など文章読解の場面であることから、漢字を見て漢越語に置き換え、その意味を把握するストラテジーを使用していると思われる。特に大学院生であれば日々多くの書物を読む機会があることが予想されるが、漢越語を利用すれば読解の効率は上がるだろう。

専門書に関しては「自分の専門分野」と「専門外」という反対の例が挙げられている。前者は難解な専門用語に触れる際に理解を助けるのだと言う。一方「専門外」の場合は、自分が知らない日本語の語彙が出てくる文章で、背景知識がなくとも漢字を漢越語に変換することにより意味が把握できるのだという。いずれにせよ、未知の漢字語彙に接した際、それを漢越語に変換することによって意味の輪郭を把握するといったことに漢越語知識を利用していると言える。

学部生の特に日本語専攻の3人は、現在まさに日本語を学んでいるわけだが、インタビューの時期はちょうど日本語能力試験前であった。3人とも受検予定であり、試験対策に取り組んでいた時期ではないかと思われる。試験のために日々文章を読むトレーニングを行っていたのではないだろうか。やはり読むという作業において漢越語を用いた意味の類推というストラテジーがよく用いられると言えるのではないだろうか。

3) 両言語間の意味の異なりによる漢越語使用回避

漢越語を用いた漢字学習の実践を行っていると回答したA、B、D、E、F、Gのうち、E、F、Gは初級ではよく利用していたが中級では利用しなくなったと語った。利用しなくなった理由について、漢越語と漢字語彙の意味の異なりを挙げた学習者が多かった。中級以上になると扱われる語彙が増え、細かい意味の区別が必要になる。さらに本研究の調査対象者は高等教育機関で学ぶ学生達であり、正確な語彙の運用が求められると考えられる。彼らは漢越語の知識が逆に干渉し、日本語の語彙の習得の妨げになることを懸念しているのだと思われる。特にFは法律を専攻しており、より厳密な意味の定義が求められるため、正確さを強く意識していると考えられる。

未知の漢字語彙があった場合、彼らはまずアプリなどを用いてその漢字語彙の意味を調べる。その際に漢越語と音もしくは意味の類似性が高いものはその類似性が記憶作業に利用される。しかし異なりが大きいと判断されるものはその時点で漢越語の知識の利用が放

棄されるのである。

4.2 介護・看護既卒者の事例から

1) 初めに受けた指導方法の影響

介護・看護既卒者の語りから、日本語学習初期に受けた指導によって推奨された学習方法が、後々まで影響を受けることが示唆された。Hが参加したAHPプロジェクトでは、ベトナムにおいても直接法による指導が行われ、授業においてベトナム語が媒介語として利用されることはなかったようである。日本語ネイティブの教師が日本語で説明し、学ぶ側も日本語でそれを理解するよう求められた。漢越語はそこでは全く使用されなかった。Hは現在でも日本語の語彙は日本語で理解していると言い、ベトナム語に置き換えることはほとんどないと語った。Kが参加したEPAプロジェクトでは日本語ネイティブの教師による直接法での指導と、ベトナム語ネイティブの教師による間接法での指導が両方行われたが、既述の通り、授業の中で漢越語を用いた指導は行われなかった。Kは自分の判断で現在も漢越語を利用しているが、漢字の学習において重要なのは「訓読み」であると主張している。それはベトナムで受けた授業において、教師から漢字の意味を表すのは訓読みであるので、まず先に訓読みを覚えるべきであると助言を受けたことが影響している。

一方でIはベトナムの大学で日本語を学ぶかわら、ドンズー日本語学校（日本語塾）にも通っていた。当該日本語塾はベトナム国内でも漢越語を用いた漢字指導で有名な教育機関である。その影響からか、Iは日本へ留学した後も同じ学習方法を維持し続けた。Jは来日前にベトナムの送り出し機関で日本語を学んだが、そこで受けた日本語教育では漢越語による漢字の指導は行われなかった。その後日本へ留学し、最初に入学した日本語学校においても漢越語を用いた漢字指導は行われなかった。

このように、各対象者が日本語学習の初期において採用した学習方法をその後も維持している。このことから、ベトナム語母語話者の日本語習得において漢越語が実際に有効であるとするならば、初級の段階からの漢越語による指導の必要性が示唆される。

2) EPA、AHPプログラムの特殊性

HとKの語りにもあったが、EPAとAHP両プロジェクトを通じて来日した人たちは、介護留学生とは異なる点がある。1つは、来日前に1年間、集中的な日本語教育訓練を受けている点である。その背景には、EPAの場合はN3合格、AHPの場合はN2合格が来日要件となっていたことがある。もう1つは、来日後は国家試験に合格できないと在留資格が得られないという点である。それにより、現在の介護留学生（経過措置の延長により2026年度までは国家試験に合格できなくても在留することが可能）と比べた場合、否応なく学習動機が高まらざるを得ない状況があるのではないかと考えられる。

3) I、Jの事例の位置づけ

本稿の冒頭「1.1 背景」で示した介養協調査のデータによれば、Iのようにベトナムで「大学 (大学院を含む)」を卒業した者は介護留学生全体の24.4%である。そのうちどのくらいの人がIのように「日本語」を専攻したのかは分からないが、本調査結果から推測できることは、ベトナムの大学で日本語を専攻していた場合は、Iや表1のグループの学習者のように漢越語を利用できる可能性が高いということである。その場合、介護の漢字語彙の習得や国家試験の読解にかなり有利なため、このような留学生の国家試験合格率はかなり高いことが推察される。

一方、同じく介養協調査のデータからは、来日前にIのように大学等での日本語の指導、あるいはHとKのように1年間の集中的な日本語学習を受けていないJのような介護留学生が多いことが窺える。そして本稿の調査結果から推測できることは、そのような場合は、漢越語をうまく利用できる可能性は低いということである。では、Jが国家試験に合格できた背景は何であろうか。

第3著者が別の機会にJを対象に実施したインタビューによれば、Jの介護福祉士養成校のクラスメイトは、23人中21人がベトナム人で2人がネパール人であった。ベトナム人のうち介護福祉士国家試験に合格できたのはJを含め4、5人であった。また第3著者がJの養成校の留学生担当教員を対象に実施したインタビューによれば、Jは養成校入学時からクラスの中で「意欲がとても高い」学生であったという。ここから漢越語がほとんど利用できなくても、Jのような学習姿勢等があれば国家試験に合格できる可能性はあることが示唆される。

4) 介護・看護既卒者が漢越語を使う場面

介護・看護の就労現場において介護・看護既卒者が漢字を実際に書くことはそれほど多くはないのではないと思われる。報告書の作成などで書く作業が求められる場合もあるが、現在はパソコンで作成できることも多いようである。介護・看護の仕事においては、会話によるコミュニケーションが主で、文字としてではなく音として漢字語彙を使用することのほうが多いのではないかと推察される。

本調査では、漢越語を漢字語彙の意味の類推に使う人が多い結果となった。つまり、漢越語はやはり「読む」ことに有効なのである。介護・看護既卒者が就労現場で漢字を「読む」場面（書面による情報把握）はあるかもしれない。しかし、本調査結果からは、介護・看護既卒者にとって漢越語が有効利用される場面は特に国家試験に挑むときである、ということが示唆された。

5. 本研究の限界

この研究にはいくつかの限界がある。第1に、協力者の抽出を機縁法で実施したため、特に「真面目で優秀」な日本語学習者が抽出されている等、偏りの可能性がある。第2に、サンプリングが介護福祉士国家試験の合格者に限定されているため、今後は、国家試験不合格者の漢越語の利用状況に関する調査を行う必要もある。

6. 結論

本研究から得られる示唆は、ベトナム人介護人材にとって漢越語知識は国家試験対策として有効な「潜在能力」であるため、介護福祉士国家試験を目指すことになったベトナム人介護人材は、なるべく早期に漢越語を用いた漢字学習を導入することが望ましいという視点である。しかし、ベトナム語における全ての漢越語が利用可能であるというわけではないことも示唆された。音や意味の類似性が高いものは、漢越語から漢字語彙の意味推測が可能となる。一方で、異なりが大きいものは干渉を恐れて利用が避けられる場合がある。さらに、日常的に接することのない漢越語だとベトナム語の意味がすぐ把握できないので、即利用可能とはならないようである。そのため、この場合はまず純粹ベトナム語の意味と結び付ける作業が必要となると考えられる。これら本稿で得られた知見は、漢越語を利用した介護福祉士国家試験対策を今後考案していくための重要な礎となるものである。

〈謝辞〉

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究 (C)「日本におけるベトナム人介護留学生急増の背景と受入の持続可能性に関する人類学的研究」(研究代表者：比留間洋一) の助成を受けたものである。佐々木良造氏からは貴重なご意見を頂いた。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 日本介護福祉士養成施設協会調査、同協会HPの「令和元年度、令和2年度外国人留学生入学者数」に基づく。
- 2) 技能実習機構HPの「2020年3月 技能実習計画認定件数」に基づく。
- 3) 法務省在留外国人統計2020年12月1日付データに基づく。
- 4) 法務省HP 2021年6月末のデータに基づく。
- 5) (浅井・箕浦2020)、(平野・米野編2021)等。
- 6) EPAベトナム人介護福祉士に関して第3著者は、『地域ケアリング』誌上にいくつかの論考を発表してきた(天野・比留間2018, 比留間・天野2019, 2020)。それらの基となった調査を通して、EPAベトナム人介護福祉士候補者の国家試験合格率が高い(第1陣の場合、第1回目の試験で93.8%)理由の1つに漢越語を利用した学習成果があるという着想を得たが、未調査のままであった。そこで、本論文のためにEPA介護福祉士(国試合格者)の1人(K)を対象に漢越語の利用についてインタビューを行なった。

- 7) (日本介護福祉士養成施設協会 2021a:5)
- 8) (日本介護福祉士養成施設協会 2019:74-76), (日本介護福祉士養成施設協会 2021a:23-25,67)
- 9) 加藤 (2017) の調査対象者の母国における日本語学習歴は2ヶ月が13%、3ヶ月が37%、4ヶ月が24%、5ヶ月が13%、6ヶ月が8%、7ヶ月が5%であった。また、『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク)の既習歴は、13～20課が35%、21～25課が40%、26～50課が25%となっている。日本語能力試験の合格級に関する記載はなかった。
- 10) ファン・道上・比留間 (2021:16) より転載。
- 11) 表1における日本語学習歴は、本人の回答による。表2における日本語学習歴は、各協力者が日本語学習を開始してから現在に至るまでを指している。ただしHの日本語学習歴は、ベトナムの看護大学で教員をしていた期間を引いた年数である。
- 12) したがって、本論文のために実施したインタビュー以外にも、別の場面や目的などに調査協力者から様々な話を聞いた機会がある。表1の協力者は第1著者 (Phan) と第2著者 (道上)、表2の協力者は第3著者 (比留間) の知り合いである。
- 13) AHPプログラムについては、AHPネットワークスのホームページ参照 (www.ahp-net.org/custom.html (2021/10/9閲覧))。
- 14) 一般社団法人 国際交流&日本語支援Y編著『介護の言葉と漢字ハンドブック ベトナム語版』、同編著『介護の言葉と漢字ワークブックベトナム語版 毎日の漢字テスト』。
- 15) 上述した質問の他、インタビューの最後 (10分程度) に、介護福祉士国家試験の実際の問題から抜粋した問題文と選択肢をベトナム語に翻訳しながら解くように依頼した。その際、問題文と選択肢の中で使用されている漢字語彙を漢越語に変換してもらい、漢越語の利用に関する実態 (漢越語を利用している/していない) がインタビュー通りかどうかを確認した。が、その結果は紙幅の関係上、本稿では割愛する。
- 16) インタビューの文字化は、本研究の目的 (介護福祉士国家試験対策を考案する) に照らして表2の協力者に絞った。
- 17) 「3.1 留学生の事例」の記述内容は、ファン・道上・比留間 (2021) と一部重複する。本稿は、ファン・道上・比留間 (2021) についての口頭発表に対する質疑応答、及び、口頭発表後に実施した介護看護既卒者のインタビュー結果を踏まえてファン・道上・比留間 (2021) を発展させたものと位置づけられる。
- 18) <https://mazii.net/search?hl=vi-VN>
- 19) ベトナム語の音節は頭子音、介母音、母音、末子音、声調の5つの要素で構成されている。(清水 2011:2)

～				声調
NG	U	YÊ	N	
頭子音	介母音	母音	末子音	

- 20) Bは2009年以前に日本語能力試験を受検した。旧試験の3級は、現在のN4に相当する。

参考文献

浅井亜紀子・箕浦康子

- 2020 『EPA インドネシア人看護師・介護福祉士の日本体験－帰国者と滞在継続者の10年の追跡調査から』 明石書店、東京。

天野裕子

2017 「ベトナム語母語話者が使用する日本語語彙学習ストラテジー」『小出記念日本語教育研究会』(25)、21-33。

天野ゆかり・比留間洋一

2018 「EPA ベトナム人介護福祉士候補者から見た日本の介護—介護人材が介護を学ぶとき—」『地域ケアリング』Vol.20(4)、81-85。

加藤登紀

2017 「ベトナム人技能実習生を対象とした感じ学習の方法と意識に関する質問紙調査（中間報告）」『JSL 漢字学習研究会誌』(9)、76-81。

清水政明

2011 『世界の言語シリーズ4 ベトナム語』大阪大学出版会、2。

中川健司

2010 「介護福祉士候補者が国家試験を受験する上で必要な漢字知識の検証」『日本語教育』(147)、67-81。

中川健司・中村英三・角南北斗・齊藤真美

2012 「介護福祉士国家試験科目別出現漢字に関する調査」『漢字学習研究会誌』(4)、19-28。

中川康弘・小林学

2008 「ベトナム人日本語学習者の漢越語知識と漢字語彙習得についての一考察 — 現地における正誤判断テストとインタビュー調査から—」『桜美林言語教育論叢』Vol.4、75-91。

日本介護福祉士養成施設協会

2019 『介護福祉士を目指す外国人留学生等に対する相談支援等の体制整備事業 アンケート調査 報告書』。

日本介護福祉士養成施設協会

2021a 『外国人介護人材の質の向上等に資する学習支援等調査研究事業 報告書』。

日本介護福祉士養成施設協会

2021b 『介護福祉士国家資格取得に向けた留学生指導についてのガイドライン』。

濱川祐紀代

2015a 「日本語非母語話者教師の使用する漢字学習方法とその特徴—非漢字系若手教師への質問紙調査より—」『日本語教育方法研究会誌』vol.22, No.1、18-19。

濱川祐紀代

2015b 「日本語非母語話者教師を対象にした漢字学習ストラテジー指導の試み」『日本語学 2015 年 4 月臨時増刊号』34(5)、116-125、明治書院。

濱川祐紀代

2016 「漢字教育の実践と学習の方法論 長期記憶によるつながりを踏まえて」埼玉大学博士論文。

平野裕子・米野みちよ編

2021 『外国人看護師：EPA に基づく受入れは何をもたらしたのか』東京大学出版会、東京。

比留間洋一・天野ゆかり

2019 「なぜベトナム介護福祉士は EPA を離れたのか？：来日前の背景から」『地域ケアリング』Vol.21(7)、90-96。

ベトナム人中上級日本語学習者の漢字習得における漢越語利用 (PHAN THI MY LOAN・道上 史絵・比留間 洋一)

比留間洋一・天野ゆかり

2020 「EPA 介護福祉士候補者のモチベーションの変化と国家試験の影響－ベトナム人1期生の事例－」『地域ケアリング』 Vol.22(13)、78-82。

ファン ティ ミー ロアン・道上史絵・比留間洋一

2021 「ベトナム人中上級日本語学習者はいかに漢字・漢字語彙を習得したか－漢越語の利用に関する予備的なインタビュー調査より－」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.28, No.1、16-17。

松田真希子

2016 『ベトナム語母語話者のために日本語教育 ベトナム人の日本語学習における困難点改善のための提案』春風社。

Oxford, Rebecca L (著)

1990 *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*, New York: Newbury House (穴戸通庸, 伴紀子 (訳) (1994) 『言語学習ストラテジー-外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社。

Phan Thi My Loan

2006 「ベトナム人日本語学習者に対する効果的漢字指導法」大阪大学博士論文。

Phan Thi My Loan・道上史絵・富田健次

2017 「ベトナム人を対象とした新しい漢字・漢語学習指導法の提案－上」大阪大学大学院言語文化研究科ベトナム語専攻。

※おもな執筆担当箇所は次のとおりである。道上史絵：1.2、2.2、3、4.1(2)(3)、4.2(1)(4)、6、比留間洋一：1.1、2.1、2.3、4.2(2)(3)、5、Phan Thi My Loan：3 (表3)、4.1(1)および研究全体を総括。